

# 謝 辞

川田洋一

ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所(IOM RAS)の前身である「アジア博物館」は1818年に創立され、19世紀後半より中央アジア、シルクロードの各地で発掘・収集した貴重な仏教經典の写本などを保存・研究してきた。コレクションは約60の言語の多岐にわたり、約10万点を擁し、内容・規模において世界最大クラスであり、学術の発展に大きな貢献を果たしてきた。

なかでも、ニコライ・ペトロフスキーの収集したコレクション、そしてセルゲイ・オルデンブルク調査隊が中心になって収集した約2万点(断簡を含める)の敦煌遺書類、コズロフ探検隊による内蒙古の故城ハラホト(黒水城)から発掘した約6,000点の西夏文献資料は人類の至宝として有名である。

東洋古文書研究所と創価学会、ならびに東洋哲学研究所の長年にわたる学術交流の成果として、2005年には、コズロフ探検隊収集品から「法華經写本シリーズ」6として『ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支部所蔵 西夏文「妙法蓮華經」——写真版』をIOM RASと学会で共同出版し、このたびはペトロフスキー・コレクションから同「写本シリーズ」13「ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所所蔵 梵文法華經写本(SI P/5他)——写真版」(東洋学研究所サンクトペテルブルク支部は2007年に所名を改称)を発刊することとなった。貴重なコレクションの写真版発刊に理解と協力をいただいたイリーナ・ポボワ所長ならびにIOM RASの関係者に厚く感謝を申し上げたい。

写本SI P/5(現在の管理番号はSI 1925/1927)は、カシュガル駐在の総領事であったペトロフスキーが1893年、カシュガルで入手したことから、「ペトロフスキー本」、「カシュガル本」と通称されてきた。ホータン(于闐)に住む人物が見つけたものを、ペトロフスキーがその写本の大部分を入手し、首都サンクトペテル

ブルクのアジア博物館へ送付。仏教学者のオルデンブルクによって紹介され、ヨーロッパの学术界に多大な反響を呼び起こした。オルデンブルクは「ベトロフスキーの輝かしい発見は、東トルキスタンの考古学研究に新時代の到来を告げた」と、その業績を高く評価している。

ホータンはタクラマカン砂漠の南辺に位置し、中国とインドやイランとの交易の中継地にあたり、西域南道最大のオアシス都市としてにぎわっていた。古代から玉の産地、蚕種移入伝説で有名であり、仏教も古くから盛んに信奉され、大乘仏教が開いた地である。なお、「写本シリーズ」3として出版したクラウス・ヴィレ博士編著による『カーダリク出土 梵文法華經写本断簡』はホータンの東115キロの遺跡で発見された梵文法華經写本を紹介したものである。

写本 SI P/5 は法華經研究の基礎文献となる重要なものであり、世界的に多くの研究が行われてきた。その特色として、次の4点が考えられよう。

- ① 言語学的考察から9-10世紀書写と推定されているが、古い伝承を保持していること。
- ② 葉のサイズが横57センチ、縦18センチと貝葉型の紙写本として最大級であること。
- ③ 中央アジア由来の写本は断簡が多い中、総数468の葉と断片のうち396葉と圧倒的な部分を保有しており、その多くが保存状態も比較的良好で美麗であること。
- ④ 奥書に約50人の写本奉納者の回向・発願文がホータン語とサンスクリット語の混交語で残されており、当時の法華經信仰の実態を知る上で、きわめて貴重な資料であること。

創価学会と東洋哲学研究所は共同でこれまで数多い梵文法華經の写本のなかから、特に貴重と考えられる写本を写真版やローマ字版として「写本シリーズ」を発刊してきた。梵文法華經写本は出土地・発見地別に(1)ネパール系(2)ギルギット系(3)中央アジア系の3系統に分類される。これまで刊行した「写本シリーズ」を概観すると、3系統の代表的な写本を網羅したことになり、スタート以来、19年がたち所期の目的を達成しつつあることは大いなる喜びである。下記は発刊してきた14点の梵文法華經写本を3系統別に分類したものである。

(1) ネパール系写本

- 『ネパール国立公文書館所蔵 梵文法華經写本(No. 4-21)——写真版』  
『ネパール国立公文書館所蔵 梵文法華經写本(No. 4-21)——ローマ字版1』  
『ネパール国立公文書館所蔵 梵文法華經写本(No. 4-21)——ローマ字版2』  
『ケンブリッジ大学図書館所蔵 梵文法華經写本(Add. 1682 および Add. 1683)——写真版』  
『ケンブリッジ大学図書館所蔵 梵文法華經写本(Add. 1684)——ローマ字版』  
『東京大学総合図書館所蔵 梵文法華經写本(No. 414)——ローマ字版』  
『英国・アイルランド王立アジア協会所蔵 梵文法華經写本(No. 6)——ローマ字版』  
『パリ・アジア協会所蔵 梵文法華經写本(No. 2)——ローマ字版』  
『大英図書館所蔵 梵文法華經写本(Or. 2204)——写真版』  
『大英図書館所蔵 梵文法華經写本(Or. 2204)——ローマ字版』

(2) ギルギット系写本

- 『インド国立公文書館所蔵 ギルギット法華經写本——写真版』

(3) 中央アジア系写本

- 『旅順博物館所蔵 梵文法華經断簡——写真版及びローマ字版』  
『カーダリク出土 梵文法華經写本断簡』  
『ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所所蔵 梵文法華經写本(SI P/5 他)——写真版』  
(※「写本シリーズ」6は西夏文「妙法蓮華經」である)

日本の南條文雄(1849-1927)とオランダのヘンドリック・ケルン(1833-1917)が編集した世界初の梵文法華經の校訂本 *Saddharmapundarika* (Bibliotheca Buddhica 10) (通称「ケルン・南條本」, KN本) (1908-1912) が、ロシア科学アカデミーより発刊された。現在もサンスクリット語の法華經研究の基本資料となっている。校訂作業には7つの写本と2つのテキスト(フコーの石板刷りテキスト、ワイリー所有の木版テキスト)が使用された。

「写本シリーズ」はそれらのうち、SI P/5 も含め6つの写本を刊行しており、

現在、ワッターズ将来写本 (KN 本での略号 W) の保管場所が不明なので、実質、すべての関係写本を網羅したことになる。下記は底本および校訂に使用された写本・テキストと「写本シリーズ」との関連である。

【底本として使用された写本】

1. 『英国・アイルランド王立アジア協会蔵 梵文法華經写本 (No. 6)——ローマ字版』(略号 R; KN 本での略号 A)

【校訂に使用された写本】

2. 『ケンブリッジ大学図書館蔵 梵文法華經写本(Add. 1682 および Add. 1683)——写真版』(略号 C3, C4; KN 本での C4 の略号は Ca)<sup>1)</sup>  
(※ただし校訂で C4 とともに使用されたのは C3 ではなく C5 であった)
3. 『ケンブリッジ大学図書館蔵 梵文法華經写本(Add. 1684)——ローマ字版』(略号 C5; KN 本での略号 Cb)
4. 『東京大学総合図書館蔵 梵文法華經写本(No. 414)——ローマ字版』(略号 T8; KN 本での略号 K)
5. 『大英図書館蔵 梵文法華經写本(Or. 2204)——写真版』(略号 B; KN 本での略号も B)  
『大英図書館蔵 梵文法華經写本(Or. 2204)——ローマ字版』(略号 B)
6. 「ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所蔵 梵文法華經写本(SI P/5 他)——写真版」(略号 O; KN 本での略号も O)

なお、IOM RAS の配慮で、SI P/5 以外の中央アジア系梵文法華經写本多数も合わせて収録できたことは喜びに堪えない。より一層の学術的貢献が出来たものと確信する。末尾ながら、貴重な論考をお寄せいただいたマルガリータ・ヴォロビヨヴァ博士、オスカル・フォン・ヒニューバー博士、貴重なご助言ご協力をいただいた創価大学国際仏教学高等研究所所長の辛嶋静志教授、編集の中心者として尽力した水船教義委嘱研究員をはじめ、当プロジェクトにかかわったすべての関係者のご尽力に心から感謝申し上げたい。

追悼

ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支部の前所長にして、世界的に高名な西夏学・中国学の専門家であられたエヴゲニー・クチャーノフ博士が2013年5月24日に逝去された。クチャーノフ博士は1998年、東京での「法華経とシルクロード」展開催の折りに所長として来日されるなど、学術文化交流に多大な貢献をされた。本出版の関係者一同とともに衷心より弔意を表明する次第である。

注

- 1) KN本 [p. XII] の Preliminary Notice, Add. MS. 1682 と Add. MS. 1683 は、それぞれ 1683, 1684 とすべきである。参照 Willy Baruch, *Beiträge zum Saddharmapūṇḍarīkasūtra* (Leiden: D. J. Brill, 1938), p. 2, notes 3 and 4.

(かわだ よういち／東洋哲学研究所所長)